

令和元年6月18日現在

機関番号：62618

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26244022

研究課題名(和文)日本語諸方言のプロソディーとプロソディー体系の類型

研究課題名(英文) Japanese prosody and prosody typology

研究代表者

窪園 晴夫 (KUBOZONO, HARUO)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・理論・対照研究領域・教授

研究者番号：80153328

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 30,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本各地の方言(鹿児島、甑島、徳之島、与論(以上鹿児島県)、小林(宮崎県)、波佐見、島原(長崎県)、天草、田浦(熊本県)、北方町(佐賀県)、むつ市、津軽(青森県)、盛岡(岩手県)などの諸方言)や中国のシベ語において現地調査を行い、語アクセントおよび語アクセントと文イントネーションの関係を考察した。疑問文や呼びかけ文などの音声特徴を明らかにし、語アクセントに変容を及ぼすことがあることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで詳細な調査研究がなされてこなかった日本の諸方言において、語レベルおよび文レベルのプロソディー(語アクセント、文イントネーション)に関する調査研究を行ったことは、新規の言語事実を発掘したという意味で重要である。これらの諸方言の中には甑島方言や徳之島方言のように消滅の危機に瀕した方言も含まれている。さらに、現地調査によって得られたデータを音韻論・音声学の視点から分析し、語アクセントと文イントネーションの関係について所定の分析結果を得たことも学術的意義としてあげることができる。これらの研究成果を多くの学会発表や論文の形で公表・公刊したことも学術的に重要な貢献である。

研究成果の概要(英文)：This study collected data from fieldwork in various dialects of Japanese and Ryukyuan as well as the Sibe language spoken in China and analyzed the phonological properties of word-level prosody and its interaction with sentence-level prosody. The dialects include Kagoshima, Koshikijima, Tokunoshima and Yoron (Kagoshima Prefecture), Kobayashi (Miyazaki Prefecture), Hasami and Shimabara (Nagasaki Prefecture), Amakusa and Taura (Kumamoto Prefecture), Kitakata (Saga Prefecture), Mutsu and Tsugaru (Aomori Prefecture) and Morioka (Iwate Prefecture). It discovered that word-level prosodic structures are often modified or overridden by sentence-level prosodic structures in several sentence types such as interrogative sentences and vocative sentences.

研究分野：言語学

キーワード：プロソディー アクセント イントネーション 日本語 言語類型論

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本語はアクセントの宝庫と言われるほど、諸方言に多様なアクセント体系が存在している。隣接する韓国語諸方言との類似性は言うまでもなく、アジア・アフリカの声調言語に近いアクセント体系もある一方で、語アクセント的特性を持たない体系(無アクセント体系)もある。しかし諸方言のアクセントについて調査研究が進む中、文レベルのプロソディー(イントネーション)の分析は遅々として進んでいない。世界の言語研究の中で日本語の音声研究に求められているのは、日本語諸方言のプロソディー体系(アクセント+イントネーション)の全体像を世界の諸言語と対照して、相対的に位置づけようとする努力である。そして、このような対照言語学、言語類型論的な視点から分析した日本語の研究結果を、広く世界に向けて発信することである。比較的調査研究が進んでいる東京方言や近畿方言、鹿児島方言のような主要方言においても、大量のアクセント資料が蓄積されている一方で、呼びかけや疑問といった種々のイントネーション現象については調査分析が進んでいない。世界の諸言語との比較による対照言語学的分析、類型論的研究、あるいは(最適性理論などの枠組みによる)理論的研究はさらに遅れている。

2. 研究の目的

本研究は上記のような状況を打破し、日本語の研究を世界的な規模の言語研究に資するために、実証的な方言調査から得られたデータを類型論的視点から考察し、日本語諸方言のプロソディー体系を世界の諸言語のプロソディー体系の中に位置づけようとするものである。その目的を達成するために、本研究では方言アクセントに関して優れた研究業績を持つ研究者を集め、その研究対象を語(アクセント)から文(イントネーション)に広げて日本語諸方言のプロソディー体系の全容を明らかにする。そしてその結果を類型論的視点から考察する。具体的には(i)プロソディー類型研究が日本語のプロソディー分析にどのような洞察を与えるか、(ii)逆に、日本語の研究が韓国語をはじめとする他の言語の分析と言語類型論研究・プロソディー理論研究にどのような知見を与えるか、この2点を明らかにする。これらの研究成果を毎年開催する国際シンポジウムと英文論文集で発表し、日本における言語研究の成果を広く世界に向けて発信する。

3. 研究の方法

本研究の根幹を成すのが、(i)日本語諸方言のイントネーション調査、(ii)イントネーション調査データの理論的・類型論的分析、(iii)研究成果の世界への発信、以上3つの柱である。(i)については絶滅危機方言とされる方言を中心に独自の調査を進めるとともに、(ii)については、研究会を年に3回開催し、お互いの調査結果を議論する形で日本語プロソディーの分析を進める。(iii)に関しては、毎年、年度末に海外の研究協力者を招いて国際シンポジウム(会議言語は英語)を開催し、日本語諸方言のプロソディー分析を発表する。また合計4回開かれる国際シンポジウムの成果を英文論文集にとりまとめ、海外の出版社から出版する。

4. 研究成果

(1)これまで詳細な調査研究がなされてこなかった日本の諸方言において、語レベルおよび文レベルのプロソディー(語アクセント、文イントネーション)に関する調査研究を行い、新規の言語事実を発掘した。これらの諸方言の中には甑島方言や徳之島方言のように消滅の危機に瀕した方言も含まれている。さらに、現地調査によって得られたデータを音韻論・音声学の視点から分析し、語アクセントと文イントネーションの関係についていくつか興味深い分析結果を得た。とりわけ、九州の諸方言(鹿児島方言、甑島方言、小林方言等)において、疑問文と呼びかけ文が文末のピッチ下降で現れること、このピッチ下降を実現するために、語アクセントが一定の変容を受け、特定の条件下においてはアクセント型の対立が失われることを明らかにした。これらの研究成果を多くの学会発表や論文の形で公表・公刊したことも学術的に重要な貢献である。

(2)言語・方言ごとの具体的な調査内容・結果は次のとおりである。

- ・鹿児島県甑島方言: 疑問文イントネーションが文末モーラの下降調という特徴を持つことと、呼びかけイントネーションがすべてA型のアクセントパターンで発音される(よってA型とB型の区別が失われる)ことを明らかにした。
- ・鹿児島県種子島方言: モーラを単位とする二型アクセント体系であることを確認した。
- ・鹿児島県奄美徳之島浅間方言: 漢語ならびにその複合語を含む本土方言用の調査語彙リストを用いたアクセント調査を行ない、これまでの調査研究の対象外となっていた多数の資料を収集報告した。
- ・鹿児島県与論島方言: 複数形に関する調査を行い、この方言では additive plural marker の *taa* と associative plural marker の *taa* のアクセントが異なっていることを明らかにした。
- ・宮崎県小林市方言: この方言がモーラではなく音節を単位とする1型アクセント体系であり、文節末の音節が高く発音されることを確認した。
- ・長崎県波佐見町方言、熊本県芦北町田浦方言: 複合語に前部要素の長さにかかわらず式保存が成り立つことを確認した。それらの成果に基づき、九州二型アクセント体系の祖体系の仮説を発表した。
- ・長崎県長崎市方言: 「誰・何・どこ」などの不定語から「も」までで一つのマイナー句が形成され、そこにB型のトーンが実現することを明らかにした。また同現象について、従来の複合規則による説明を試みた。
- ・長崎県南島原市方言: A型は第2モーラのピッチが高いが、第2モーラに特殊モーラを含むときは第1モーラが高いこと、B型は文節末の音節のピッチが高いことを明らかにした。
- ・佐賀県杵島方言: アクセント体系を調査した結果、この方言のアクセント型と琉球語のアクセント型の間には興味深い対応があることを発見した。
- ・佐賀県北方町方言: この方言の外來語アクセントにA型が少ないこと、およびB型にF0下降が見られることを明らかにした。
- ・青森県むつ市方言: 母音連続を含む語においてアクセントが実現する実態を明らかにした。
- ・シベ語: イントネーションについて、周辺で話されている現代ウイグル語との対照分析を行った。またシベ族が新疆ウイグル自治区に250年前に移動する前に接触していたと考えられる

モンゴル語のホルチン方言との対照分析も行った。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 44 件)

1. Kubozono, H. 2018. Postlexical tonal neutralizations in Kagoshima Japanese. In H. Kubozono and M. Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization*. 27-57. Berlin: De Gruyter Mouton. 査読有 [10.1515/9783110567502-003](https://doi.org/10.1515/9783110567502-003)
2. Kubozono, H. 2018. Bilingualism and accent changes in Kagoshima Japanese. In H. Kubozono and M. Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization*. 279-329. Berlin: De Gruyter Mouton. 査読有 [10.1515/9783110567502-011](https://doi.org/10.1515/9783110567502-011)
3. Kubozono, H. 2018. Prosodic evidence for syllable structure in Japanese. In C. Guillemot, T. Yoshida and S.J. Lee (eds.) *Proceedings of the 13th Workshop on Altaic Formal Linguistics*. (MIT Working Papers in Linguistics 88). 35-50. MIT. 査読有
4. Kubozono, H. 2018. Pitch accent. In Yoko Hasegawa (ed.) *The Cambridge Handbook of Japanese Linguistics*. 154-180. Cambridge: Cambridge UP. 査読有 10.1017/9781316884461
5. Kubozono, H. 2018. Secondary high tones in Koshikijima Japanese. *The Linguistic Review* 36(1). 25-50. 査読有 <https://doi.org/10.1515/tlr-2018-2006>
6. Kubozono, H. 2018. Loanword accent of Kyungsang Korean: A moraic analysis. In Kunio Nishiyama, Hideki Kishimoto and Edith Aldridge (eds.) *Topics in Theoretical Asian Linguistics. Studies in Honor of John B. Whitman*. 303-329. John Benjamins. 査読有 <https://doi.org/10.1075/la.250.15kub>
7. Kubozono, H. 2018. Focus prosody in Kagoshima Japanese. In R. Goedemans, J. Heinz, and H. van der Hulst (eds.), *The Study of Word Stress and Accent: Theories, Methods and Data*. 323-345. Cambridge: Cambridge University Press. 査読有 10.1017/9781316683101
8. Kubozono, H. 2018. Mora sensitivity in Kagoshima Japanese: Evidence from *no* contraction. In Ryan Bennett et al. (eds.) *Hana-bana: A Festschrift for Junko Ito and Armin Mester*. 査読有 https://cpb-us-e1.wpmucdn.com/sites.ucsc.edu/dist/3/529/files/2017/12/Kubozono2018_moras_no_contraction-1bccfiq.pdf
9. Uwano, Zendo. 2018. Accentual neutralization in Japanese dialects. H. Kubozono and M. Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization*. De Gruyter Mouton. 129-155. 査読有 [10.1515/9783110567502-006](https://doi.org/10.1515/9783110567502-006)
10. 上野善道 2018. 「徳之島浅間方言のアクセント資料(5)」『国立国語研究所論集』14: 293-322. 査読有, doi/10.15084/00000858
11. 上野善道 2018. 「徳之島浅間方言のアクセント資料(6)」『琉球の方言』42: 137-172. 査読有
12. 木部暢子 2018. 「富山の方言 - 砺波市方言の引用標識をめぐって - 」『砺波散村地域研究所紀要』35: 1-11. 査読無
13. 久保智之 2018. 「満語、満語口語、錫伯語の语音特点」(漢語)『満族・錫伯族語言歴史文化国際研究会 会議論文集』(中国・東北) pp.16-21. 査読無
14. 松森晶子 2018. 「熊本県葦北郡芦北町田浦方言の二型アクセント体系」『日本女子大学紀要 文学部』第 67 号、pp. 15-37. 査読無. <http://id.nii.ac.jp/1133/00002712/>
15. Yosuke Igarashi, Yukinori Takubo, Yuka Hayashi, Tomoyuki Kubo. 2018. Tonal neutralization in the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan. H. Kubozono and M. Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization*. De Gruyter Mouton. 83-128. 査読有 [10.1515/9783110567502-005](https://doi.org/10.1515/9783110567502-005)
16. Toshio Matsuura. 2018. Tonal neutralization and lexical category in Nagasaki Japanese. H. Kubozono and M. Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization*, De Gruyter Mouton, 58-82. 査読有. DOI 10.1515/9783110567502-004
17. 松浦年男 2018. 「山形県村山方言における有声促音の音声実現に関する予備的分析」『北星学園大学文学部北星論集』55(2), 43-52. 査読無. <http://id.nii.ac.jp/1238/00002221/>
18. Kubozono, H. 2017. Accent in Japanese phonology. In Mark Aronoff (ed.), *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics* (online encyclopedia). 査読有 DOI: 10.1093/acrefore/9780199384655.013.279
19. 窪園晴夫 2017. 「どうして赤ちゃん言葉とオノマトペは似ているの?」窪園晴夫(編)『オノマトペの謎—ピカチュウからモフモフまで』121-142. 岩波書店 査読無
20. 上野善道 2017. 「徳之島浅間方言のアクセント資料(3)」『国立国語研究所論集』12: 139-61, 査読有, doi/10.15084/00000858.
21. 上野善道 2017. 「徳之島浅間方言のアクセント資料(4)」『国立国語研究所論集』13: 209-42, 査読有, doi/10.15084/00001379.
22. 上野善道 2017. 「青森県南部方言の名詞のアクセント資料」『国語研究』80: 1-22. 査読有
23. 木部暢子 2017. 「地域語に見る大和言葉」『日本語学』36-1, pp.52-61. 査読無
24. 久保智之 2017. 「満洲語口語について - 新疆ウイグル自治区のシベ語を中心に - 」*Proceedings of the 7th International Conference of Center for Manchu Studies*(韓国・高麗大学校) pp.99-120. 査読無
25. 久保智之 2017. 「音声言語と文献言語と歴史言語学: シベ語と満洲語と歴史言語学」『歴史言語学』(日本歴史言語学会)第 6 号、pp.71-78. 査読無
26. 松森晶子 2017. 「北琉球における C 系列 2 音節名詞の語頭音節の長音化—その原因について考える—」『日本語の研究』第 13 巻 1 号、pp. 1-17. 査読有. https://doi.org/10.20666/nihongonokenkyu.13.1_1
27. 松森晶子 2017. 「長崎県西彼杵郡旧・外海町の二型アクセント体系」『日本女子大学紀要

- 文学部』第66号、pp. 31-46. 査読無. <http://id.nii.ac.jp/1133/00002503/>
28. 松森晶子 2017. 「九州二型体系の複合語アクセント型はなぜ中和するのか—通時的視点から探る—」 『日本語の研究』、第13巻4号、pp. 51-67. 査読有. https://doi.org/10.20666/nihongonokenkyu.13.4_51
 29. Mayuki Matsui, Yosuke Igarashi, Shigeto Kawahara. 2017. Acoustic manifestation of Russian word-final devoicing in utterance-medial position, *Journal of the Phonetic Society of Japan*, 21(2), 1-17. 査読有
 30. 松浦年男 2017. 「佐賀県北方町方言の外来語アクセントおよび音声実現に関する予備調査報告」 『北星学園大学文学部北星論集』 55(1), 25-33. 査読無. <http://id.nii.ac.jp/1238/00002169/>
 31. Kubozono, H. 2017. Diversity of pitch accent systems in Koshikijima Japanese. *Gengo Kenkyu* 150. 1-31. 査読有 https://doi.org/10.11435/gengo.150.0_1
 32. Kubozono, H. 2016. Diphthongs and word accent in Japanese. *KLS* 36, 195-206. 査読有
 33. 木部暢子 2016. 「記述方言学の研究動向」 『方言の研究』(日本方言研究会) 2、pp.63-82. 査読有
 34. 松森晶子 2016. 「声調言語としての宮古祖語—特にそのTBUとして機能する韻律上の単位について—」、田窪行則・ジョン・ホイットマン・平子達也(編)、くろしお出版、『琉球諸語と古代日本語—日琉祖語の再建にむけて』、pp. 145-165. 査読有
 35. 松森晶子 2016. 「八重山諸島黒島方言アクセントの仕組み—その韻律範疇 PwD と下がり目の出現条件—」 『言語研究』第150号、pp. 59-85. 査読有. https://doi.org/10.11435/gengo.150.0_59
 36. 松森晶子 2016. 「三型アクセント記述研究の現在と未来—隠岐島の三型アクセントに焦点を当てながら—」 『音声研究』 第20巻第3号、pp. 24-45. 査読有. https://doi.org/10.24467/onseikenkyu.20.3_24
 37. Martin, Andrew, Yosuke Igarashi, Nobuyuki Jincho, Mazuka Reiko. 2016. Utterances in infant-directed speech are shorter, slower. *Cognition*, 156, 52-59. 査読有. <https://doi.org/10.1016/j.cognition.2016.07.015>
 38. 五十嵐陽介 2016. 「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」 『言語研究』 150, 1-25. 査読有
 39. 五十嵐陽介 2016. 「名詞の意味が関わるアクセントの合流：南琉球宮古語池間方言の事例」 『音声研究』、20(3)、46-65. 査読有
 40. 松浦年男 2016. 「二型アクセント方言のイントネーション」 『現代音韻論の動向：日本音韻論学会の歩みと展望』 100-103. 査読有
 41. 佐藤久美子 2016. 「長崎市方言の不定語を含む文におけるアクセントの弱化と中和」 『筑紫日本語研究 2015』、73-81. 査読無
 42. 佐藤久美子 2016. Prosody of sentences with indeterminate words in Nagasaki Japanese 『音韻研究』 19、73-80. 査読有
 43. 佐藤久美子 2016. 「長崎方言におけるアクセントの変化」 『九州大学言語学論集』36、255-270. 査読無. <http://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~linguist/kupl/doc/kupl36-matsuura.pdf> (松浦年男との共著)
 44. Kubozono, H. 2015. Japanese dialects and general linguistics. *Gengo Kenkyu* 148. 1-31. 査読有 https://doi.org/10.11435/gengo.148.0_1

[学会発表](計 37 件)

1. 窪園晴夫 2018. Evidence against superheavy syllables in Japanese: Quantity sensitivity in Tokyo and Kagoshima Japanese. 7th International Conference on Phonology and Morphology, ソウル大学.
2. Kubozono, H. 2018. Default word prosody and its effects on morphology. 26th Japanese/Korean Linguistics Conference, UCLA.
3. Kubozono, H. 2018. Vocative and question intonation in Japanese. Phonology Colloquium, UC Santa Cruz.
4. Kubozono, H. 2018. Vocative and question intonation in southern Japanese. 5th International Conference on Phonetics and Phonology (ICPP 2018), 国立国語研究所.
5. 窪園晴夫 2018. 「鹿児島方言と甕島方言の呼びかけイントネーション」 日本言語学会第157回大会ワークショップ、京都大学.
6. 久保智之 2018. Phonological characteristics of Sibe and Manchu. 台北：Institute of History and Philology, Academia Sinica.
7. 久保智之 2018. 「锡伯語口語的标记法」(漢語による講演。「シベ語口語の表記法」) シンポジウム「清代満文档案とシベ語の時空対話」、長春：東北師範大学
8. 久保智之 2018. 「満語、満語口語、锡伯語の語音特点」(漢語による発表。「満洲語、満洲語口語、シベ語の音韻論的特徴」) 満族・錫伯族語言歴史文化国際研討会、長春：東北師範大学
9. 松森晶子 2018. 「奄美大島南部・瀬戸内町の音節構造」 第13回音韻論フェスタ、早稲田大学早稲田キャンパス.
10. 新田哲夫 2018. 「南琉球多良間方言アクセントの下降と上昇」 共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」 第2回合同研究発表会、国立国語研究所
11. Nobuko Kibe, Kumiko Sato, Taro Nakanishi and Kohei Nakazawa 2017. Corpus based study of Japanese dialects: Regional differences in case marking system, *Methods in Dialectology XVI*.
12. Kibe, Nobuko and Oshima, Hajime. 2017. Plural Forms in Yoron-Ryukyuan, *The 25th*

- Japanese/Korean Linguistics Conference, University of Hawai'i at Mānoa.
13. 久保智之 2017. 「満洲語口語について - 新疆ウイグル自治区のシベ語を中心として」第7回満洲学センター国際学術会議「満洲語文学と東北アジア文化」ソウル：高麗大学校
 14. 久保智之 2017. Some findings in the phonology of Manchu and Sibe. ベルリン：ベルリン自由大学
 15. 松森晶子 2017. 「九州二型体系の複合語アクセント型はなぜ中和するのか—通時的視点から探る—」第12回音韻論フェスタ、京都・立命館大学朱雀キャンパス。
 16. Akiko Matsumori 2017. Prosodic units and phonological processes of the Miyako-jima and Tarama-jima systems in Miyako Ryukyuan, *Workshop on Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean*. The Center for Korean Studies, University of Hawaii at Manoa.
 17. 五十嵐陽介・広瀬友紀 2017. 「統語的曖昧性を解消する韻律的手段：東京方言と近畿方言」第31回日本音声学会全国大会シンポジウム。
 18. 松浦年男 2017. 「イッド(一度)にロクゴ(六合)? 語根融合における音韻制限の多様性」日本言語学会第154回大会。
 19. 松浦年男・安永大地・水本豪 2017. 「ERPによる複合語アクセントの研究：現状と課題」日本音声学会第31回全国大会ワークショップ「プロソディ研究のための方法論」
 20. Toshio Matsuura 2017. Towards a typology of compound and loanword prosody in tonal dialects of Kyushu Japanese, *Workshop on 'Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean'*. The Center for Korean Studies, University of Hawaii at Manoa.
 21. Kubozono, H. 2016. Mora and syllable in the pitch accent system of Koshikijima Japanese. 東京外国語大学AA研国際シンポジウム「Japanese and Korean Accent」
 22. Kubozono, H. 2016. Mora and syllable in pitch accent systems. KALS & KACL International Conference. プサン国立大学。
 23. Kubozono, H. 2016. Language contact and accent changes in Japanese. アメリカ音響学会・日本音響学会ジョイントミーティング Special session on 'Cross-linguistic speech production and perception' 於ハワイ・ホノルル。
 24. Kubozono, H. 2016. The phonological structure of Japanese mimetics and motherese. NINJAL International Symposium 'Mimetics in the World's Languages'. 於国立国語研究所。
 25. 木部暢子 2016. 「対格表現の地域差 - 助詞ゼロをめぐる - 」、東京外国語大学語学定例研究会、東京外国語大学
 26. 久保智之 2016. 「音声言語と文献言語と歴史言語学—シベ語と満洲語と歴史言語学」日本歴史言語学会大会、福岡：九州大学
 27. 久保智之 2016. 'siwe' gisuN=i aŋe=i gisuN=we afsi are-mi <シベ語による発表。和訳：「シベ語の音韻表記」>、第1回シベ語言語文化国際会議、福岡：九州大学・府中：東京外国語大学。
 28. Akiko Matsumori 2016. Reconstruction of the accentual system of Proto-Northern-Ryukyuan, *The Symposium: Japanese and Korean Accent: Diachrony, Reconstruction, and Typology*. ILCAA(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)。
 29. 松森晶子 2016. 「琉球祖語アクセント再建に向けて—今、何を記述し、残しておくべきか」国際日本文化研究センター第3回共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたか - 日本言語学史の光と影」(京都：国際日本文化研究センター)。
 30. 新田哲夫 2016. 「白峰方言のプロソディーの諸問題—アクセント体系および複合名詞アクセント—」国立国語研究所キックオフワークショップ「語のプロソディーと文のプロソディーの相互作用」国立国語研究所
 31. 五十嵐陽介 2016. 「アクセント型の対応に基づいて日琉祖語を再建するための語彙リスト「日琉語類別語彙」」『日本語学会2016年度春季大会予稿集』233-228. 学習院大学
 32. Igarashi, Y. 2016. A unified list of cognate words in Japanese and Ryukyuan for the purpose of historical comparative linguistics. Japanese and Korean accent: diachrony, reconstruction, and typology. 東京外国語大学AA研。
 33. Igarashi, Y. 2016. An urgent task for research on the tone systems of Japanese and Ryukyuan: What should fieldworkers do in the next decade? Phonology Forum 2016. Kanazawa Univ. Satellite Plaza.
 34. 五十嵐陽介 2016. 「琉球語を排除した「日本語派」なる系統群は果たして成立するのか? —「九州・琉球語派」と「中央日本語派」の提唱—」国際日本文化研究センター共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたか - 日本言語学史の光と影」第3回共同研究会。国際日本文化研究センター。
 35. 五十嵐陽介・平子達也 2016. 「「肩・種・汗・雨」と「息・舟・桶・鍋」がアクセント型で区別される日本語本土方言—佐賀県杵島方言と琉球語の比較」『日本音声学会第30回全国大会予稿集』138-145.
 36. 佐藤久美子 2016. 「長崎市方言におけるアクセントの中和現象について - 不定語を含む語/文の分析」九州方言研究会。
 37. 佐藤久美子 2016. 「長崎市方言における不定語を含む語・文の音調と複合法則」日本言語学会第153回大会ワークショップ「イントネーション研究の新展開」。

〔図書〕(計 4 件)

1. Kubozono, H. (ed.) 2019. Special issue: Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean. *The Linguistic Review* 36(1). Berlin: De Gruyter Mouton. 150頁
2. Kubozono, H. and Giriko Mikio (eds.) 2018. *Tonal Change and Neutralization*. Berlin: Mouton de Gruyter. 383頁
3. 窪園晴夫(編) 2017. 『オノマトペの謎 ピカチュウからモフモフまで』岩波書店. 166頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：上野 善道

ローマ字氏名：(UWANO, Zendo)

所属研究機関名：東京大学

部局名：人文社会系研究科(文学部)

職名：名誉教授

研究者番号(8桁)：50011375

研究分担者氏名：木部 暢子

ローマ字氏名：(KIBE, Nobuko)

所属研究機関名：人間文化研究機構国立国語研究所

部局名：言語変異研究領域

職名：教授

研究者番号(8桁)：30192016

研究分担者氏名：久保 智之

ローマ字氏名：(KUBO, Tomoyuki)

所属研究機関名：九州大学

部局名：人文科学研究院

職名：教授

研究者番号(8桁)：30214993

研究分担者氏名：松森 晶子

ローマ字氏名：(MATSUMORI, Akiko)

所属研究機関名：日本女子大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：20239130

研究分担者氏名：新田 哲夫

ローマ字氏名：NITTA, Tetsuo

所属研究機関名：金沢大学

部局名：歴史言語文化学系

職名：教授

研究者番号(8桁)：90172725

研究分担者氏名：五十嵐 陽介

ローマ字氏名：(IGARASHI, Yosuke)

所属研究機関名：一橋大学

部局名：大学院社会学研究科

職名：准教授

研究者番号(8桁)：00549008

研究分担者氏名：松浦 年男

ローマ字氏名：(MATSUURA, Toshio)

所属研究機関名：北星学園大学

部局名：文学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：80526690

研究分担者氏名：佐藤 久美子

ローマ字氏名：(SATO, Kumiko)

所属研究機関名：人間文化研究機構国立国語研究所

部局名：言語変異研究領域

職名：プロジェクト非常勤研究員

研究者番号(8桁)：60616291